
『英語科教育実習読本』制作における Peer review（学習者間批評）の有効性について

関 典明

1 はじめに

「英語科教育実習」の授業内プロジェクトとして、教育実習を終えた受講生（4年生）に「後輩へのアドバイス」をテーマに実習期間中の成功・失敗体験などを一人 B5 版 2 枚（約 3,000 字）の原稿を書かせ『英語科教育実習読本』（以下『読本』と略す）という冊子にまとめ「英語科教育実習」を受講する 3 年生に新年度開講前に配付し、熟読させた上で筆者の授業に臨んでもらっている。これまで 10 数年継続している実践である。

これまでは各自の原稿の余白を多めにとった「書き込み用紙」に記名でコメントを書き込む時間を 3～4 週間にわたって授業時間内に設け、書かれたコメントは作業終了日に原作者に原稿が戻されてはじめて読む。それぞれが原稿に書かれたコメントを踏まえて改訂した最終稿を 2 週間後に提出するというのが決められたサイクルであった。

最終日の授業時に原作者がクラスと同級生から寄せられた様々なコメントが書かれた自分の原稿を丹念に読みあう緊張感と感謝の顔をコメントしてくれた人に向ける姿は、必ず見られた光景であり、最終日まではコメントが書き込まれた各原稿を私が保管して、コメントの特徴・傾向などにも注意して見てきた。そこで気がついたことは、年々、コメントの「内容が薄く」また「分量も乏しく」なり、原稿の誤字脱字についても気づいているのか無視しているのか判別がつかないような状況が散見されるようになったことである。

そこで、今年度は【資料 1】のようなコメント記述用紙を原稿の作者に対して個別に書き、最終日に全員からのコメントを一括して渡す方式を採用し、作業途中他人が同じ原稿に対してどのようなコメントをしているかわからないようにした。また自分の原稿に対してどのようなコメントがされているかも全くわからないようにした点は例年通りである。また、【資料 2】の記録用紙に毎授業（2017 年 10 月 10 日、17 日、31 日）終了時に作業の進捗状況を書かせて作業完了時に総括のコメントを書かせた。

本稿は、全学生の初稿と、peer review を経ての最終稿とを比較対照し、原作者が同級生のどのようなコメントを受け入れて原稿を改訂したか、もしくは指摘された事を無視（放置）したと思われるかをコメントと原稿の変容について詳細に分析・検証したものである。同時にその学生が、他にどのようなコメントをしたかを追跡した。事例数は多くないが、『読本』制作のため実施する peer review について、今後この活動が効果をあげるために考慮すべき点、改善すべき点などを明らかにしたい。【資料 3】として最新の『読本』を付した。

2 Peer review 実施の背景

学生が、peer review を行うにあたって4月開講時に先輩からのアドバイスが掲載された『読本』の助言のおかげで自分の教育実習が成功したという実感を持てる事が自分の原稿が後輩のために役立て欲しいという連鎖が生まれると思っている。しかし、当該学生は必ずしもそう思ってはいなかったようである。前年度の『読本』を事前に熟読し持参して初回の授業に臨むことをシラバスに明記しておいたが、忘れてきている者もあり、手元にあっても内容について簡単な質問に答えることができない者ばかり、自分にとって役立つそうと感じた箇所だけを「かじり読み」しているか、マーカーで文章に多く線が引かれていても内容はほとんど記憶していない者などに加えて、全受講生9名中4名の欠席があり、初回の授業から暗い気持ちになったことをよく覚えている。先輩達が残してくれた貴重な助言集として長く存在意義があった『読本』は文字がぎっしり詰まっている「読みにくい」冊子になってしまっていると推察した。自分自身があまり熱心に読まないのであれば、自分が書いた原稿も同級生の原稿も後輩に熱心には読まれないと思い、最初に原稿を書く時点で、またその原稿改訂作業にも熱が入らないと推察される。また自分に直接寄せられた助言ではなく、自分にとって有益な助言を探すために『読本』を精読すること自体が学生の日常生活から離れてしまっているとも推察できる。

「英語科教育実習」の受講学生が卒業時に教職に就くことを当初から目的としていない場合、教育実習は「兎にも角にも実習が終わってしまえばそれで善し」という3週間のイベントに捉えられ、教師になるための自己啓発の機会ではない。そうした学生は教育実習の3週間は「消化期間」として教壇実習は事前準備や本番当日が大変であることは理解していても、実習校の生徒のために少しでもよりよい授業に改善するように時間をかけて工夫・努力するよりも残り回数だけを気になるようである。受講学生は、進路について相互におよそ情報を得ており、教職を目指す人は教職に就かない人の文章内の「本音と建前」についても理解できていて、逆に教職に就かない人が教職を目指す人の文章については、敢えて内容・文章の細部には「踏み込まない」という暗黙のルールが存在しているかのように思えた。また、教職にはつかない同士では、後輩のために有益な『読本』を完成させようという目的の為に敢えて嫌われるような手厳しいコメントをすることに労力を費やすよりも何も触れずにいて現状の人間関係を保とうとしているかのように思えた。教職に就くことを考えずに教育実習をする者が大多数の原稿執筆者となっている現状からすると『読本』は本来の制作意図から離れてしまい、教育実習を無難に終えるための「知恵袋」となってしまうかもしれない。

3 Peer review：初稿と他へのコメント内容との関連

- ①原稿に明らかな執筆要領からの逸脱があるにも関わらず、その指摘をしなかった者は自分の原稿内に他の者よりも多くの誤字（誤変換）数があった。ただし、これは統計的な有意さを述べるほどサンプル数はない。
- ②自分の原稿に明らかな執筆要領からの逸脱があった者は、他の者の原稿の誤字（誤変換）を徹底的に校

正はせず、文章内容の明瞭さに欠けるというコメントを友人と思われる人を除きほぼ全員に対して行いコメント内容はやや攻撃的であった。また、原稿執筆者が容易に自分の主張を理解できるように理由を添えた記述はできていない。

- ③自分の原稿内容に自信があまり持てていないと思われる者は、他の者の原稿の内容評価にも自信が持てず、迷った末に評価している様子が机間巡視で見取れた。また最初にコメント欄を書いてから内容評価をする順番でしていた。総じて、コメントは評価の理由説明ではなく感想となっている。
- ④自分の原稿内容に自信が持てていないと思われる者は、他の者の原稿の内容評価ではなく誤字など形式面について注意深く点検・指摘をすることに多くの時間を費やしていた。結果として内容面についてコメントが十分にできなかったことを時間不足のせいにして弁解をする類型化が見取れた。
- ⑤他の者の原稿を読む前に自分の原稿に対してやや自信を持っていた者は、他の者の原稿を読み進むにつれて自分の原稿の不完全な点について思い当たり始めたか、他の原稿内容の不備の指摘よりも自分の原稿を基準にして他を褒めることがコメントの中心となる類型化が見取れた。
- ⑥自分の原稿に饒舌さ、冗長さの傾向がある者は、他の者の原稿に対して字数の余裕がないにも関わらず、詳しい記述を求めるコメントを書く類型化がある一方、文章の一部を削除する代案は示せていない。
- ⑦自分の原稿をあまり時間をかけずに書き上げたと提出状況から思われる者は、他の原稿に対して内容の評価は甘く、批判的なコメントはほとんど書いていなかった。
- ⑧自分の原稿を早く書き上げて提出した者は、peer review の評価作業も他よりも早く完了させていた。ただし、時間には十分余裕があるにも関わらず、コメントは説得的なものより総じて紋切り型のもので、原稿改訂は人から言われてするのではなく自分で気づいてするものだというニュアンスがあり、peer review による原稿改善作業自体に意義を見出していない様子が見えた。

4 Peer review :

全ての他の原稿を読み評価・コメント書きを終えた時点の感想（抜粋）

ここでの①～⑧は、前節3の学生に対応させたものである。

- ①自分の原稿が、情報量の詰め込みすぎ、自分の思いだけを書いた独りよがりのものでなくなってしまったと思ひ反省しています。
- ②人の文章を読んでいて違和感があることが自分もやっつけているものも多かったです。人の文章を読みながら自分の反省も同時にしていました。（中略）限られたスペース内に分かりやすくコメントを書くのが大変だとわかりました。口で伝えるのとは全然違いました。
- ③実習中は互いに会う時間はなかったので、今回このような相互評価を通して皆がどのような実習をしてきたかが分かり良かったです。
- ④他の人が書いた文章を批判的に読み、批評をすることの難しさを感じました。途中で述べられていることが全て正しいように感じてしまい、一文一文や言葉一つ一つに注目することができなかったと思います。
- ⑤自分の経験からどのようなアドバイスをすれば後輩のためになるかをしっかりと考えた文章であることが伝わりました。学校の特色や学年によって同じ「コミュニケーション英語」でも授業内容が違って

て、同じものは一つもないのが授業の面白さだと改めて感じました。

- ⑥原稿によっては、具体性が高く書かれていたが対処法が書かれていなかったり、少し触れただけで、逆に不安を煽るような部分もあった。触れるならば、しっかりと深掘りして対処法まで書くべきだと感じた。『読本』は3年生にとってとても身近なバイブルとなり得る存在なので、辞書的な役割を持つとも思います。ポイントがどこか見つけにくい書き方になっているものはもったいないと思った。
- ⑦全体的な構成で、ほとんどの人は前年度の先輩達にならって小見出しをつけており、明らかに私が書いたものより場面ごとに区別があり読みやすかった。
- ⑧一人一人伝えたいことが異なり面白いなと思いました。共通しているのは、これから実習を控えている3年生に対して微力でも何か力になりたいという気持ちだと思います。実習を成功させて欲しいという気持ちがみんなの原稿から伝わってきました。昨年先輩達も同じような気持ちで原稿を残してくれたのかと思うと改めて感謝したい気持ちになりました。相互批評を受けて、修正し、より完成度の高い『実習読本』に仕上げられたらと思います。

5 Peer review：最終稿のどこがどれだけ改訂されたかの分類結果

1) 執筆要領からの逸脱の修正による分量増 (2名)

初稿の見た目も明らかに他とは異なり分量が少ないことが明らかであった。結果的に文字数(スペース含めず)で、1,933字→2,288字と1,719字→2,060字と2人共に総文字数も当然増加したが、新たな観点からの助言は加えられていなかった。

2) 「小見出しなし」から「小見出し」付け (2名)

2,610字→2,647字と1,588字→1,825字。前者は初稿で残り文字スペースが多いとはいえない状態であり、他から「小見出し」をつけた方が良いと言うコメントはもらってはいなかったが、9名の中でつけていないのが自分を含めて2名だけであったことを踏まえて「自主的に」つけたようである。この点については、日頃の授業内でのやりとりを観察していると、「この人は他から言われて自分の考えを簡単に変えない」と思われており、原稿の見た目が読みにくいと感じても敢えてそこには触れずに自分自身での気づきを待っていたかのようなようであった。後者は、初稿では(2ページ目4行で完)とまだかなりスペースが余っており、最終稿ではpeer reviewを通して自分自身が学んだことを一段落にまとめ最後に付け加え総量増としていた。

3) 冒頭1文字下げにより段落分けを明確化 (1名)

初稿2,579字→最終稿2,544字と文字数を若干減らし同時に段落分けを行い、自分で原稿を読みやすく改訂。寄せられたコメントで「内容は充実しているが読みづらい」と書かれたことが改訂の契機になったと推察される。

4) 初稿と最終稿でほとんど変化なし (3名)

3名中2名は、コメント書きは他よりも速いが内容はやや「紋切り型」で、自分のコメントにより改訂作業を積極的に起こさせる意図はあまり感じられず、「お疲れ様～」のような類型となり、自分の原稿に対しても他からは踏み込んだコメントをもらっていない。この点では、日頃の人間関係、課題

に対する取り組む姿勢などが反映されているように推察された。残り1名は、教員採用試験の論作文の添削をしたことで他の学生よりも筆者には思考・行動パターンを理解できているが、対象となる文章中の論点発見と自論の展開に非常に時間がかかる傾向がある。強い説得が私からないと迷って筆が進まないことが度々あり、今回も明確な指摘はないので、初稿の大幅改訂には自分では踏み切れなかったと推察される。

5) コメントと peer reading を活かし、内容の一部を充実させた最終稿にした (1名)

6 Peer review : 考察とまとめ

今回従来とは異なる方法で peer review を行った。対象となる学生が異なるので方法の優劣を一概には論ずることはできない。ただ、従来の「原稿直接書き込み方式」とでも呼ぶような方法では、コメントに署名を入れることにより責任を持たせていても内容は非常に紋切り型のものばかりが増えて、コメントが初稿改訂の原動力にはなりえないという危機感があった。譬えて言えば、Web上の記事に対して「いいね!」「拍手!」などを付けるのと大差がない類のコメントが増えたのであった。

また、最近過去数年ではクラス内での人間関係や過去の授業内外の取り組みによる「先入観」の為か、peer review をしている時間帯であっても静粛に集中して作業に取り組むことができず、他の原稿に対して露骨な不信感を表明したり、聞く者が不快な思いをする冷やかしの文言を大声で浴びせるなど、教職を志す以前の学生としての言動、品性に問題を感じた場面も少なからずあった。

今回は、原稿には書き込みをせずに、別紙のいわば worksheet を利用した peer review をすることにより、誰が誰に対してどのような内容のコメントを行ったかの累積記録を明確にし、初稿と最終稿とを対比してコメントの影響力を推察することができた。ここでも、やはり日頃の人間関係などが関わっており、「あの人には何をコメントしても、心には届かない」という類の諦め、それならば差し障りがないコメントをしておけば済むので、敢えて時間・労力をかけて peer review には取り組まないという姿勢や、自分自身が文章を読んで行動が変化したという過去の体験がない、自分の文章に自信がなく、自分の力で原稿の一言一句を改訂していくことは教員の支援がないと全然できない、明確・具体的な指示なしでは改訂作業ができないという諦めから平均点より少し上ぐらいの原稿を完成させることができればそれで満足という受講学生の本音が見えてしまう。

Worksheet の内容構成の評価基準とその例示について受講生全員に対し丁寧に説明し、質問等を受けてから作業を進めたいと考えていたが、作業期間の各回でも欠席者が複数出て、全員が揃うことがなかったため断念した。途中で、評価の比較検討などを行うことで評価の妥当性・信頼性が確認できたはずである。コメントの質を向上させるため次年度の課題となる。

Peer review の取り組みの質が落ちたとの気づきから今回活動の改訂を行った。学生の様子を今後も注意深く観察しつつ、『読本』制作本来の有効性を追求していきたい。

(学校法人成城学園 参与/元成城学園中学校高等学校 教諭/本学非常勤講師)

【資料 1】

論文No.		さん・君の論文					
		A	B	C	D	E	F
内容構成	規準	読み手の立場を考 えて文章は明瞭、説 得力がある。	読み手の立場を考 え文章は明瞭であ る。	読み手の立場を考 え、自分の主張を述 べている。	時々何を言っている のか分かりにくい文 章がある。	自分の思いを書い ているだけで読み手 が置き去りにされて いる。	自分の思いを自分 の枠内で書いてお り、読み手が想定さ れていない。
	コメント	段落のバランスがと れており、印象深い 言葉が読み手に伝 わる。	段落が構成されて おり、印象深い言葉 がある。	文の長さ、段落の長 さなどなどバランス に欠ける。	同じ言葉、文が重複 して出て強い印象 が残らない。	同じ言葉、文が無駄 に繰り返され、意図 がつかみにくい。	平凡な同じ言葉、文 が繰り返され、薄い 内容が大部分であ る。
形式	規準	A)誤字(誤変換)・脱字は全くない。 B)誤字(誤変換)・脱字がある。 C)誤字(誤変換)・脱字が複数ある。 D)誤字(誤変換)・脱字が多数ある。 E)執筆要領から逸脱しているところがある。 F)執筆要領から逸脱している。					
	コメント ・証拠						
作業日	年		月	日	氏名		

【資料 2】

『実習読本』相互批評 作業進行票 氏名

No.	氏名	完了日
1	阿久津 覚	
2	飯塚 香夏子	
3	柏木 遥菜	
4	久保 夏帆	
5	砂田 真莉香	
6	曾我 奏子	
7	原澤 太熙	
8	東山 華佳	
9	西島 圭太	

「相互批評」作業を終えてのコメント	記入日	年	月	日

【資料 3】

(注)『英語科実習読本 2018』の実際は B5 版で行数 41、文字数 39 である。所収にあたり行数を本誌に合わせて変更したため、『読本』ページとの対応が崩れ若干読みにくくなったことは筆者の責任である。また本稿中の分析番号と原稿の順番とは対応させていないことをあらかじめお断りしておきたい。

前書き

2017 年度は、これまで経験したことがない不思議な「廻りあわせ」が重なった年であった。

- 1) 担当した 4 年生全員が前期に教育実習を終えた。
- 2) 例年の 4 年生と共に 3 年生の「英語科教育法 A」も担当した。

これは、偶然の成せる業ではあったが、それを最大限に活用し 2017 年 11 月 30 日に行われた「3 年生対象の教職ガイダンス」を目標にしてクラス全体でプレゼンテーションの準備を行った。以下、その概略である。

- ① 後期 3 回目の授業から 4 年生は、各自が書いた「後輩へのアドバイス」を相互批評を書面で計 3 回にわたって実施した。評価するルーブリックを提示し所謂「パフォーマンス評価」を行い評価の根拠を書かせた。また最後にはその評価作業を通しての初稿に対する自省をまとめて書かせ、各自の最終稿を書きあげた。教育実習が後期にある学生が一人でもいる場合には後期にこれだけ集中した取組はできなかったであろう。
- ② 上記ガイダンスに備えて、パワーポイントを用いたプレゼンテーションを行う上での留意点を、聴衆分析から始め、制限時間に見合うスライド枚数・原稿分量、内容構成の原則など例を挙げながら行った。さらに、11 月のプレゼンでのキーワードを探すことを 3 年生の教科書「英語科教育実習生の心得」の章を読ませた後、ブレインストーミングという手法を活動冒頭は私もグループに参加して行った。プレゼンテーションの心得やスライドの実際、ブレインストーミングなどは他学部ではゼミなどで行われていると推察しますが、英文科 4 年生にとっては初体験であった新鮮であったとのことでした。
- ③ ガイダンス直前の授業で、本番と同じ制限時間、レジュメ、スライドを準備してプレゼンを実施し、プレゼンは映像記録に残した。またプレゼン後、「聞き手」としての感想などを述べ、私からも 3 年生が現時点で履修中の内容を踏まえたコメントを加え、最後にプレゼンの良かった点、改善すべき点などを書いたものを映像記録と共にプレゼンターに渡し、本番までリハーサルを行ってもらった。

本番は、わずか 10 数分間、多少の延長を想定しての時間設定とはいえ、制限時間内で

伝えるべき内容を精選し、実行するために、パワーポイントなど ICT 機器を活用したプレゼンを企画・実践する実習はこれから教員となる者として貴重な体験であるだけでなく必須のスキルと思う。

一方、後輩へのアドバイスの要諦は、「コミュニケーション力」が大事ということになりそうである。これは実習校で指導をいただく教員、実習校の生徒との間に当てはまることである。ただ、これは大学の授業内で簡単に学修できるものではない。教育実習の期間さえどうにか乗り越えることができれば良いと安直な

考えの人には手が届くものではない。それは社会人として必須・基本である。読者たる3年生諸君は本書を読み進めながら、丁寧に自己点検をすることから始めて欲しい。

(注) 以下、「本文」である。

後輩に向けてのアドバイス

阿久津覚

実習中の反省点から、これから実習へ行くみなさんへアドバイスをいくつか送りたいと思います。

【教壇実習】

第一に教壇実習についてですが、授業前に入念な準備をしておくことです。前述の通り自分が準備を完璧に行ったつもりでも思わぬところでボロが出ます。完璧以上の準備を行い、少しでも分からないことがあれば担当教員に相談をしてください。また、50分ないし55分という授業時間は自分の思う以上に短いです。毎回の授業でプリントの配布や板書に時間をかけるとそれだけで相当な時間を失ってしまいます。授業前にプリントの枚数を列ごとに分けておくことや、次の授業でも同じように板書をする例文やフレーズは前もって画用紙に書き、それを黒板に張るなどちょっとした工夫で時間の問題は解消されます。

また、担当する学年、学級の実情を前もって把握できるといいでしょう。当然ながら学級ごとに授業への積極性や理解度は異なります。自身の担当する学級はどのような生徒がいるか、授業の雰囲気はどうかなど、事前に把握しておくことが大切です。中学生は1学期の初めにプロフィールカードを書くことが多いので、可能ならばそれを借りてどのような生徒がいるかを確認するといいでしょう。

教壇実習については、生徒視点の授業や、生徒のレベルに合わせた授業を行うことが重要であると考えます。生徒にとって大きな負担をかける授業にならないようにしてください。具体的にはライティングの作業は中学生には大きな負担となっていたようなので、極力ライティングの作業は少なくしました。また、実習前はオールイングリッシュの授業を行うように指導教官から言われていましたが、一年生の授業で英語のみでの説明はかなり負担となると判断し、極力英語を使い、生徒の反応を見て日本語で説明するということを心掛けました。オールイングリッシュを行う際は、生徒の理解度に合わせた英語を使ってください。

教壇実習が進んでいくうちに、生徒理解も深まり、どの生徒が積極的に発言するか、またどの生徒が英語に関して理解が深いかなどわかってくるかと思います。積極的に授業に参加してくれている生徒は挙手や発言も非常に多くて授業進行の手助けになってくれると思います。ですが、全員の生徒が授業に参加できることが理想だと思います。そのため、授業の最初には生徒全員が参加でき、わかりやすく楽しい、生徒に負担がかかりにくい、このような要素を満たしたアクティビティを取り入れるべきだと考えます。私の学校では簡単なグリーティングの後、歌を歌い、1 minute reading という数種類の簡単な英文を音読するというウォーミングアップを行っていました。この2つのウォーミングアップは上記の要素を多く満たしており、非常に有効的であったと考えます。歌については、私の実習担当学年が中学一年生で、英語を習いたての生徒が多いとのことだったので、なるべくわかりやすい発音で簡単な単語が使われた The Beatles の Yellow Submarine を使いました。理解度や進度に応じて曲を合わせるべきです。高校での授業で歌をウォーミングアップとして用いるなら、流行している歌を取り上げて良いかもしれません。

【生活面】

生活面については、生徒と積極的なコミュニケーションを取ることです。おそらく生徒たちは実習生に興味を持ち、生徒たちから積極的に話しかけてくれるでしょう。それだけで満足せず、自身からも積極的に生徒に話しかけましょう。給食やお昼休みは生徒と交流をする良い時間です。私は、昼休みは控室へは戻らず教室で生徒と話すことを心掛けました。また、それらの時間以外にも部活動中や登校指導、下校指導の時間も有効に使い生徒と交流しましょう。しかし、教師と生徒という立場を忘れてはいけません。気が緩むとつい言葉遣いが荒くなってしまいます。しっかりとした言葉遣いをしてください。また生徒たちも歳が近いからか実習生にはフランクに接してくると思います。最終週には私のことを「さとるちゃん」と呼ぶ生徒もいました。親しい関係になっているとわかる点では良いことですが、やはり教員という立場上そのような呼び方はふさわしくなく、きちんと注意すべきであったと思います。自身が一教師であるという自覚を持ち、授業だけでなく生徒の生活態度等にも注意を向けてください。

【その他個人的にアドバイスしたいこと】

睡眠についても助言があります。間違いなく実習中は教材研究や授業準備等で夜遅くまで作業をすることになります。私の場合、指導案やワークシートの作成が学校ではコンピューターが使えずできなかつたため、それらの作業は家に持ち帰り行っていました。朝の雑務もあり、学校へは7時ごろに着かなければならなかつたので睡眠時間はおよそ3～4時間でした。一度徹夜で授業準備をして教壇実習に臨んだことがあります。寝不足で最大限のパフォーマンスを發揮できないまま失敗してしまったこともあります。徹夜は絶対に厳禁です。どんなに忙しくても睡眠はとりましょう。また、本当に眠くなっていまい、パフォーマンス面に不安が生じる場合はカフェイン剤等を常備しておくといいです。私も普段から持ち歩き、いざというときに助けられました。

最後に、精神面でのアドバイスです。失敗してしまったことは反省し、後に引きずらないでください。失敗をして次の授業に対して不安になるのもわかりますが、生徒たちはそれを敏感に感じとります。教師は生徒を魅了する actor であると同時に、授業を指揮する conductor でもあります。不安な気持ちで授業を行っても成功はできません。失敗は次に活かすため反省して忘れる。これで問題ありません。教えることに責任と自信をもって教壇に立ってください。実習中は様々な不安なことがあると思います。そのときは、同じ境遇である実習生はもちろん、実習先、大学の先生にも話してみてください。実習生同士で悩みや問題点を共有しあうことで何か授業を行う際のヒントが見つかるかもしれません。

【最後に】

上記のことを心にとめて実習に臨んでください。教育実習は皆さんが4年間教職課程で学んできたことの集大成となります。確かに2週間ないし3週間はかなり忙しく心身ともに疲弊すると思います。ですが、自身の努力した分だけ生徒の反応も良いものとなって返ってきます。悔いの残らない実習にしてください。皆さんの実習が実りあるものとなることを願っております。

〈はじめに〉

私は5月29日から6月17日（19日反省会）の3週間、母校の私立流通経済大学付属柏高等学校で教育実習をさせていただきました。当校は国公立・私立大学、流通経済大学の進学を目指す普通科Ⅰ類と、競技者としての道を進みたいという男子生徒が在籍する普通科Ⅱ類、難関国公立大学や医・歯・獣医・薬学部を含めた最難関私立大学などへの進学を目標とする普通科Ⅲ類の3つの類型からなっていますが、私は1年生Ⅲ類のコミュニケーション英語Ⅰと3年生Ⅲ類の英語表現を担当させていただきました。HR担当クラスはⅢ類の1年8組でした。教壇実習は実習4日目からさせていただき、総時間数は18時間でした。（HR、総合学習の時間を除く。）実習に対する皆さんの不安が少しでも和らいたら良いと思います、体験した内容を具体的に書きたいと思います。私の反省点や体験が皆さんの参考になれば幸いです。

〈事前打ち合わせ〉

私は5月2日に実習先でのオリエンテーションがありました。その際に担当教諭の発表があり、自分が担当させていただくHRクラス、授業、教材を教えて頂きました。お忙しい中、お時間を頂くので前もって確認したいことなどをまとめておくと思います。担当の先生の授業時間に教壇実習をさせて頂くことが多いと思うのですが、担当の先生の時間割表や授業で使用しているプリントをオリエンテーションの際にもらえたことでイメージが湧きやすくなり、事前準備もはかどりました。また、実習前ではありますが指導教諭の計らいにより、オリエンテーション日の帰りのSHR時に自己紹介をする機会を頂くことができました。そのことによって実習初日から生徒と仲良くなることができたと思います。また、実習開始前に担当の先生の授業を見学させて頂き、事前準備の進捗を確認して頂きました。

〈実習期間中〉

実習初日は先生方の講話というものがああり、授業見学などをする時間はありませんでした。しかし、いたるところで自己紹介をする機会があると思うので、いくつか自己紹介の例を用意しておくと思います。また、6月9日（金）に体育祭があったため、実習開始から2週間ほどは短縮40分で授業が行われたのですが、そのことを実習初日に知りました。オリエンテーションの段階で確認することができていればよかったと思います。

授業見学は指導教諭の授業、指導教諭以外の英語科の先生による授業、担当クラスの授業、自分が高校生だった時に印象に残っている先生の授業という点を意識して、見学させて頂きました。振り返ってみると、国語科の授業、特に現代文などは同じ言語系の科目という点で教材の用い方など非常に学ぶことが多かったです。またALTの先生を迎えた授業を見学させて頂くことも大切だと思います。

教壇実習では、声の大きさと指示の明確さ、発音の点で課題を抱えていることがわかりました。声に関しては、生徒が眠らないような声を出す、壁にあてるように声を出す、自分が思っている倍の声、つまり叫ぶというアドバイスを先生方に頂き、なんとか研究授業の前に改善する事が出来ました。指示に関しては、2回繰り返すことを徹底しました。また、グループ活動など、進度に差が出るタスクでは早く終わった生徒へ

の課題や指示が必要だとわかりました。発音は練習あるのみです。

教育実習のゴールでもある研究授業ですが、いくつかルールのようなものがありました。ご存知かもしれませんが、参考になれば幸いです。

まず、指導案に使用する印鑑はシャチハタでないものです。また指導案は全部で40部ほど印刷し、校長先生、副校長先生、教頭先生には直接手渡しで、担当教科の先生や見に来ていただきたい先生方にもなるべく直接渡しました。研究授業の際には教室の後ろに他の教室から借りてきた丸椅子を実習生の仲間と協力し、出来る限り多く並べ、教室の入口には先生方の名簿と「本日はお越しくださり、ありがとうございます。〇をつけて、指導案をお取りください。」というコメントの紙を用意しました。研究授業の指導案作成時ですが、5分間余るように作成すると良いというアドバイスを頂きました。もし予定通りに授業が進み、5分余った場合に行える簡単なゲーム等を用意しておくとも良いかもしれません。これは研究授業だけではなく、教壇実習でも時間が余ってしまったときにできることを用意しておくとお自分の気持ちが落ち着くと思います。私は“Word Guessing Game”やペアもしくは先生 VS 生徒の“本文早読み競争”などを用意していました。Word Guessing Game は列対抗戦で回答者の背後（黒板に背を向けて立たせ、黒板に単語を書いておく or 回答者の背中に単語を貼る）にある単語をチームの仲間が英語でヒントをだし、わかった回答者は黒板に回答を書くというゲームです。制限時間は1分で、どのチームが早く答えられたか、もしくは、バトンタッチ方式でやるのであればどのチームが最も多くの単語を答えられたかで競います。ゲーム形式で進められるので生徒も楽しく積極的に参加してくれます。その他のアクティビティとしては、本文のフレーズを書いたカードを各グループに配り、日本語訳を読み札に、対応するフレーズが書かれたカードをとる“フレーズかるた”や“英語でフルーツバスケット”（関係代名詞の時におすすめ）なども所要時間は異なりますし、用意も必要となりますが例として挙げられると思います。よかったら参考にしてください。

研究授業の内容に関してですが、やはり多くの先生方に見て頂く機会という事で緊張していました。そんな時に担当の先生から「対象はあくまでも見ている教員ではなく、生徒なのだということを忘れないで下さい」というお言葉を頂き、生徒のための授業をするんだ！と気持ちが切り替わりました。みなさんも緊張すると思いますが、生徒のための授業をするという事を考えれば自分の緊張などどうでもよくなり、頑張れると思いますので頑張ってください。

〈おわりに〉

3週間の実習は長いようで本当にあっという間でした。他の人が体験することができない貴重な経験をさせて頂くことができ本当に良かったと思います。終わってみて、何よりも自分自身が楽しんで前向きに頑張ることが一番大切なのではないかと思います。たった3週間、失敗を恐れずに全力で挑戦させてもらいましょう。これから教育実習に行くみなさんが充実した教育実習を送れることを祈っています。頑張ってください！

1 はじめに

私は5月29日から6月16日までの3週間、母校の神奈川県立市ケ尾高等学校で教育実習をさせていただきました。科目は2年生のコミュニケーション英語Ⅱを担当し、2年7組と2年9組の計11時間授業実習を行いました。HRクラスは2年9組で、朝と帰りのSHRや放課後の掃除の時間に関わりました。とても大変でしたが、そのぶん楽しくもありとても充実した3週間でした。私の経験が、少しでもみなさんの役に立てたら幸いです。

2 事前の準備

実習が始まるととても忙しくなるので、実習前にできることはやっておきましょう。まず、実習日誌の「実習校についての記録」です。学校のホームページを見て書けるところは書いておき、それ以外は事前打ち合わせの際に資料を頂けないか聞いてみるといいと思います。次に、指導教諭の先生との事前打ち合わせです。学年をはじめ科目、範囲、教材、1回の授業の進度、いつから授業実習をするのか、単語テストはあるのか、あるなら作るまで自分がやるのか、ノートの取り方の指定はあるのかなど、できるだけ細かく聞いておきましょう。プリントを使う場合は、普段先生が使っているプリントを見せて頂けないか聞いてみるといいと思います。自分でプリントを作る際の参考になります。打ち合わせが終わったら、指導案の作成、教材の準備等、早速取りかかりましょう。実習中はとにかく時間がありません。早すぎるくらいがいいと思います。

3 授業実習

個人差はあると思いますが、教壇に立って40名近くの生徒の視線が来るととても緊張します。ですが、一生懸命取り組めばそれは生徒に伝わります。大切なのは、授業までいかに準備や練習を重ねられるかです。音読や板書の練習はやればやるだけ身になります。自信にもつながるので、努力を惜しまず頑張ってください。そして、指導教諭の先生をはじめ、授業の参観に来てくださった先生方には必ずすぐにお礼に伺いましょう。頂いた批評は素直に受け止め、次の授業に生かしてください。

また、研究授業は普通の授業よりもたくさんの先生方がいらっしゃると思います。集大成ではありますが、何か特別なことをする必要はありません。いつも通り自分らしく笑顔で臨んでください。生徒もついてきてくれると思います。

4 見学実習

前日までに必ず授業担当の先生に許可を頂きましょう。その際に、持ち物等必要なものがあるかも聞いておくといいと思います。そして、授業後はその日中にお礼と質問に伺いましょう。授業後すぐに行けると一番いいですが、先生方はお忙しいのでまずはすぐお礼を伝えに行き、お忙しいようなら放課後等に改めて伺うといいと思います。教育実習は、自分が授業をすることだけが学びではありません。空き時間は積極的に先生方の授業を見に行ってください。

5 生徒とのかかわり

まずは生徒の名前と顔を早く覚えましょう。生徒に話しかけるときに名前を呼ぶと、「名前覚えてくれてるんですか？」と喜んでくれると思います。指導教諭の先生に、名簿やクラス写真をお借りできないか聞いてみるといいと思います。貸して頂いた際は、個人情報なので取り扱いには十分に注意してください。また、私の実習校では実習生は控室で昼食をとるように言われていたので、生徒と一緒に昼食をとることはできませんでした。中学校か高校かでもだいぶ変わるとは思います。生徒と交流する時間はあまり多くなかったと思います。そのため、授業前に少し早めに教室に行ったり、放課後一緒に掃除をしたり、部活動見学に行ったりと、生徒とコミュニケーションをとれる時間を積極的に作る工夫をしました。家でできることはなるべく家でやるようにして、学校にいる時間はできるだけ生徒とかわりましょう。生徒との信頼関係は授業にもつながってきます。発問に反応してくれたり、協力的に活動してくれたり、授業が進めやすくなります。どうせなら、生徒と仲良くなれた方が絶対に楽しいです。ぜひ頑張ってください。

6 感謝の気持ち

実際に実習に行くとうわかんと思えますが、学校の先生方は授業以外にも生徒指導や部活の指導、事務作業等本当にお忙しいです。実習生の受け入れは義務ではなく、あくまでもご厚意です。お忙しい中、実習生のために時間を割いてくださっていることを絶対に忘れないでください。

7 おわりに

実習前は、正直不安と緊張でいっぱい「ついに実習が始まってしまう」と思っていました。最初の数日は気疲れからか、ひどい疲労感と眠気に襲われ帰宅後はすぐに寝てしまうこともありましたが、3週間終わって振り返ってみると本当にあっという間でした。最終日は「今日で終わりなんだ」という実感がなく、「でももう来週から来ることはないんだ」と思うととても寂しかったです。実習前はあんなに憂鬱だったのに、今は「行ってよかった」と心から思います。それくらい努力をしたからでもあると思います。人生でたった一度しか経験できない貴重なものです。みなさんにとっても、実りある充実した時間になるよう応援しています。頑張ってください。

より良い教育実習に向けて

久保 夏帆

〈はじめに〉

私は母校である藤沢市立鵜沼中学校で5月30日から6月19日までの3週間教育実習をさせていただきました。担当学級は3年6組、教壇実習は2年生を1学級と3年生を4学級させていただきました。研究授業を含め、教壇実習を15コマ行い、最終日には道徳の授業を1コマ行いました。3週間の実習では、大学の講義だけでは学ぶことのできない多くの経験をすることができました。3週間を通しての私の学びや気づきがこれから教育実習を迎える皆さんの参考になれば幸いです。

〈生徒との関わり〉

・生徒の名前を覚える

私は事前打ち合わせの際、写真付きの生徒名簿を頂きました。事前に名前を覚えることはとても難しかったですが、実習初日から生徒を名前で呼ぶことができたのは良かったと思います。生徒の名前を覚えることで、生徒との距離も縮まります。できるだけ早く学級全員の顔と名前を覚えるようにしましょう。

・部活動に参加する

私は、3週間の中でほぼ毎日、部活動見学に行きました。部活動では、授業やHRでは見ることで見ることができない姿を見ることができるため、非常に重要だと思います。しかし、見学のみで参加することがあまりできなかったことが反省点です。自分が参加できそうな部活動に関しては、積極的に生徒と一緒にいった方が良いと思います。その際は、顧問の先生や生徒からの許可をしっかりと得ることに注意しましょう。また、私は下校指導を毎日行いましたが、全校生徒と関わることでできる大切な時間だと思います。ぜひ、行ってみてください。

〈教壇実習〉

・明確な指示出しをする

私が授業実習中に一番苦労したことは、生徒への指示出しです。特に2年生の学級では、うるさくなってしまう場面が多々あり、その際の声を示し出張ったしが非常に難しく感じました。また、アクティビティを行う際のルールに関しても、上手く説明することができず生徒を困らせてしまうことや、スムーズにアクティビティに移ることができなかつたりすることも多かったです。指示出しについても、授業準備として事前に確認しておくことが不可欠です。指導教諭の先生や、他の実習生に協力してもらい模擬授業を行うことをおすすめします。また、指示を出す際は、クラス全体がしっかりと教師に注意を向けているか、聞く準備はできているかなどを確認した上で行うように心がけると、上手く授業を進めることができると思います。

・自分のしたい指導法を取り入れる

指導教諭の先生が、決まったウォーミングアップや文法説明を行っていたので、生徒の混乱を防ぐためにも、同じ授業方法を取り入れました。一方で、自由に授業を組み立てて良いという先生だったため、自分らしさを出した授業展開にも挑戦しました。具体的には、毎回の授業で必ず、間違え探しゲームやビンゴゲーム、すごろくなどの自作のワークシートとアクティビティを用意しました。毎時間手作りで準備をすることはとても負担でしたが、生徒は教師の一生懸命さを理解してくれます。教科書や問題集のタスクなどよりもずっと真剣にそして楽しそうに行ってくれると思います。失敗も沢山ありました。例えば、ビンゴゲームのワークシート作りではマス数を少なくしてしまい、想像より生徒が早く終わってしまい、あまり盛り上がりなかったこともありましたが、様々な指導法に挑戦できたことはとても良い機会となりました。事前の指導教諭との打ち合わせと共に、自分のしたいことに挑戦してみることも重要だと思います。

〈道徳の授業〉

私は、実習の最終日に担当学級にて道徳の授業をさせて頂きました。実習校では学年全体で指導案が共有されていました。そのため、その指導案通りに授業を行いました。授業の終末として教師の説話があり、

その説話を考えるのが非常に大変でした。受験や勉強へのストレスについての授業だったため、自らの受験期での励みになったものやお守りを実物を見せながら話をしました。生徒からの反応もよく、その点では、成功したと思います。道徳は決まった答えがなく指導がとても難しいですが、生徒から様々な意見や考えを聞ける授業であると思います。実習中に道徳の授業がある場合は、積極的に授業させてもらおうと良いと思います。

〈おわりに〉

実習中の毎日は、本当に反省や後悔ばかりでしたが、日々の振り返りを詳しく指導教諭の先生が行ってくれたこともあり、非常に充実した実習を行うことができました。実習中はすべきことが多く、大変な毎日でしたが、自分が正しいと思うことを精一杯することができました。教育実習では失敗がつきものです。沢山の失敗から学び、改善していくことが重要だと思うので、自分のしたいことに沢山挑戦してみてください。実りある実習になることを祈っています。

教育実習に向けて

砂田 真莉香

はじめに

私は6月12日から6月30日までの3週間母校の宮城県泉高等学校で教育実習をさせていただきました。実習が始まる前は不安で押しつぶされそうでしたが、先生方、生徒、そして楽しい実習生に囲まれ、充実した3週間の実習を終えることが出来ました。私の経験が少しでもお役に立てれば幸いです。

事前準備

私の実習校では6月15日～20日までテスト期間でした。そのため、その間は丸4日間教材研究が出来る時間がありました。それでも授業の前は焦ると思います。実際研究授業の前日は指導案を作って先生方に配ったり、授業の準備をしたりと焦ってしまったので、早め早めの準備をしておくことが大切です。私は事前打ち合わせで使用する教科書と音声CDを貸していただいたので、最初は新出単語の発音練習、本文の音読練習を中心に行いました。授業本番でCDプレーヤーの調子が悪く、CDがかからないというハプニングもありました。ですが音読練習をしていたため、CDで単語を流すことをやめ、自分で教科書を読みながら発音をし、落ち着いて対応出来ました。プリントは作った方がいいか、授業で使用しているものを使うかなども早めに確認し、準備しておくといいと思います。私は普段授業で使用しているプリントを借り、それを参考にしながら自分でプリントを作成しました。

授業見学

私の教科担当の先生はプリントを使用しながら授業を進めていました。ほとんどは教科担当の先生のやり方を見学して授業を作ると思います。授業はオールイングリッシュで進められていたため、どのような英単語を使って指示を出しているのか、ペアワークや発音練習などにどのくらい時間を取っているのかという点について注意して見学しました。実際に自分が授業をする際に役に立ったため、自分が授業をする想像をし

ながら見学の方がいいです。また、他の教科や他の学年の授業も見学することでわかることもあります。時間がある限りたくさんの先生の授業のやり方を見ておくといいと思います。授業は正解がなく、それぞれの先生方のやり方があるので、そこからいいなと思ったことを自分のものにしてください。他の教科の授業見学では指示の出し方、声の大きさなど授業の基本となるものを中心に見学しました。また、授業内容以外で生徒にどんなことを伝えているかという点にも注意しました。教科書に載っていることだけを教えるのではなく、当日のニュースの内容なども頭に入れておくことが大切だと感じました。

教壇実習

授業をするために教材研究に時間をかけ、板書や授業の進め方など準備をしても、授業は準備していた通りに進みません。授業内でプリントの数が足りず、授業の途中で印刷のため教室を離れることがあり、焦ることもありました。事前の確認は必須です。また、生徒に指名して想定していなかった答えが返ってくることもありました。準備通りにはいかないため、生徒からどんな答え、反応が返ってくるのか何通りか答えを予想しておくといいと思います。とても難しいことですが、どんなことがあっても臨機応変に対応できるといいと思います。また、声の大きさと指示出しが大切だと感じました。実際に授業をして1回言うだけでは中々伝わっていないことがわかりました。特に英語で指示だしをすると思うので、大事なことは「大きな声ではっきり何回も」を心がけてください。

生徒とのコミュニケーション

実習に行く前に皆さんが不安に思っていることだと思います。私は担任の先生からクラスの名簿を借り、早めに名前を覚えました。生徒と話すときは～君、～さんと名前を呼んでから話すことを心がけました。その結果生徒から「先生名前覚えてくれたんですね、嬉しい！」と言ってもらえたので、できるだけ早く名前を覚えたほうがいいと思います。また、ホームルームクラスと授業担当で自分の高校時代、大学時代の経験を話しました。そこから生徒が興味を持ってくれて話しかけてくれる生徒もいました。相手のことを知ることもちろん大切ですが、まず自分のことを知ってもらうとさらに良いコミュニケーションがとれると思います。担当は2年生でしたが、生徒はすでに進路を考えていたので、大学進学のアドバイス、オープンキャンパスに行ったかなども伝えることが出来ました。

体調管理

私は早起きが苦手なため、実習が始まる前から早く起きる習慣をつけていました。教育実習中は毎日6時に起きる生活をしていました。学校の近さによって起床時間は人それぞれだと思いますが、睡眠時間はとても大切です。実習中は朝早くから放課後は部活まであります。目上の先生方と会話をするので、体力的疲労の他に気疲れもありました。家に帰ったら教材研究や日誌記入などやらなければいけないことがたくさんあります。ですが夜遅くまで起きていると次の日の活動に響きます。そのため私は、日誌は記入が終わってから帰宅するようにし、夜0時までには寝ると自分でルールを決めて活動をしました。時間を決めていたため、その時間内に終わらせようと短時間でより集中できると思います。何時までに寝る、朝早く起きて教材の準備をする、など自分なりにルールを決めて生活することをお勧めします。いつもと異なる行動に想像以上に疲れが溜まると思うので体調管理には気をつけてください。

おわりに

一生に一度の教育実習です。是非充実した3週間にしてほしいと思います。不安な方もいると思いますが想像以上に楽しい3週間になるはずです。実際に学校で活動することで学ぶことが多いと思います。大変なこともたくさんありましたがとても楽しく、教育実習を母校で行うことが出来て良かったと思います。私は教育実習を通して教師になりたいという気持ちが高まりました。失敗を恐れず、楽しむことを忘れずに頑張ってきてください。

これから教育実習を行う皆さんへ

曾我 奏子

《はじめに》

私は母校である新潟明訓高等学校で3週間の教育実習を行いました。授業見学は、英語の他に現代文、倫理、物理、生物を入れて全24回ありました。担当科目は英語科で、教壇実習7回研究授業1回でした。私の母校は3つの類に分かれており、私はI類の高校から入学した一般クラス1年3組でHRを担当させていただき、同じくI類の1年1組と1年2組で教壇実習を行いました。3週間の実習期間中の学校行事として、2日目と3日目には全校授業参観、8日目には避難訓練、12日目には特別文化行事、16日目には文化祭準備、最終日には文化祭がありました。

《教材研究》

私は指導教諭の先生から次のように教えていただきました。それは、『授業中は瞬間プロフェッショナルになる』ということです。どういうことかと言うと、授業で扱う箇所において生徒から何を聞かれても対応できる力が必要だということです。それを実現させるためには、少ない時間では教材研究はできません。つまり、事前に使う教材やある程度の具体的な箇所を実習校へお聞きし、前もって準備をすることが大切です。私は、実習が始まる前の打ち合わせで、担当教諭の先生に教科書の範囲などをお聞きしました。それから、単語や本文の発音から始め、文法構造を確認するという流れで実習が始まる前から教材研究を進めました。

《授業見学》

まず、ここから実習は始まると思います。私は実習の2週目から教壇実習がありましたが、早い人だと1週目からあります。授業見学では今まで生徒の立場でしか受けたことのない授業を今度は自分が教壇に立つんだという意識で、何に気をつけるべきか、どんな工夫がされているかなどに注意して聞きメモを取ることを忘れずに取り組む必要があります。それが実際に教壇実習をする際にとっても力になってくれるはずです。授業見学中はメモを取ることでありますが、取っておくと良いものを紹介します。それは、時間です。何時からリスニングをして、本文を読んで、という詳しい時間の流れをメモしておく、自分で指導案を作る際にとっても役立ちます。

《教壇実習と研究授業》

教壇実習は1年1組と1年2組の二クラスで合計7回と、研究授業は1年2組で行いました。やはり、

準備が大きな鍵となります。私の場合、実習の1週目は授業見学が中心だったため教壇実習が先のように感じましたが、そのときから準備をすることが大切です。教材研究の他にも具体的にイメージをしてどんなことが予想されるか考える時間を持つべきです。それだけ時間をかけて準備することで、教壇実習の際には少しの自信を持って挑めると思います。行き詰まってしまうときは、担当教諭の先生に相談をすると良いです。いざ終わると、今度は教壇に立ったからこそその課題が見つかります。私は、声の大きさや、板書などの課題が多かったです。こういった基本的なことは事前に練習することができるので、時間を見つけて必ず行くと良いです。研究授業では、およそ20名の先生方や実習生が見に来ていただきました。教壇実習とは違った緊張もありましたが、それまで学んだこと全てを發揮できるチャンスです。自信を持てるほど努力することが、研究授業では糧になります。私は、研究授業の中で3つの音読を必ず行いたかったので、時間配分にとっても気を遣いました。実習生に協力してもらい、練習を繰り返しました。そして、担当教諭の先生に最終確認をお願いしました。研究授業を終えてからも、もちろん課題は残ります。多くの方々の話やご指導がその後の自分のために大きな助けになると思います。たくさん聞いて回りましょう。

《生徒とのかかわり》

HRと授業をさせていただくクラスを中心に、とにかくたくさんコミュニケーションをとるようにしました。名前を覚えることからはじめ、掃除の時間や授業の合間、放課後など時間を見つけては生徒に会いに行きました。私の場合、文化祭準備期間中ということもあり一緒に作業をすることで自然と交流が持てたと思います。もじもじしていてもしょうがないです。生徒と多くコミュニケーションが取れば、教壇実習や研究授業でも大きな意味を持ちます。実習日誌に時間がかかってしまうかもしれませんが、生徒が学校にいる間はたくさん会いに行きましょう！

《おわりに》

振り返ってみると3週間の教育実習では、毎日がとても充実していました。そして多くの学びと発見がありました。研究授業を目標に実習に取り組んでいましたが、高校生との関わりが持てる貴重な機会でもあったのでそれも忘れずに取り組むことを意識しました。教壇に立たせていただけたことは、私にとってとても大切に大きな経験です。そして、緊張から始まり思うように行かなかったこともありましたが、先生方からのたくさんのアドバイスや励ましもあり、自分で考え実践することができた教育実習でした。戸惑うことばかりかもしれませんが、実習を終えた頃にはきっと楽しかった！と思えるはずです。皆さんが充実した実習を行えるよう応援しています。頑張ってください！

教育実習のアドバイス

西島 圭太

【紹介】

今回私は、高等学校の教育実習生として第一学年を担当しました。担当した科目は、コミュニケーション英語Ⅰという科目で、授業のほとんどを英語によって行いました。この授業では、科目名の通りコミュニケー

ジョンに重きを置き、生徒同士のアクティビティをメインに授業を進め、その中で重要語句や文法事項を学んでいきます。以下では、そうした教科指導におけるアドバイスと教科指導以外のアドバイスを紹介します。

【教科指導に関して】

まず、教科指導におけるアドバイスは授業の構成に関する点と授業中の動きや指示に関する点の二点です。一点目の授業の構成に関して、展開部だけでなく導入部、まとめも重要であるという点です。もちろん展開部はその授業の核となる部分であり、もっとも生徒にとっては重要になることは事実です。しかし、その展開部を支えるのは導入部とまとめです。一見すると展開部のほうが、工夫が必要ないように見えますが、先生にとって生徒を目標の到達点にいくためには、導入部とまとめは工夫がさらに必要だと感じました。例えば、展開部に予定している内容に突然入ると、生徒たちは混乱してしまいます。しかし、導入部においてそれに関する易しい内容を英語で尋ねてみて、それに関してペアワークを行わせるなど工夫が必要になります。私の経験では、世界の学校制服に関する内容を扱う授業の最も冒頭で、当校の制服に関する考えをそれぞれに考えさせ、それを共有する、そうしたアクティビティによって抵抗なくテキストの内容に入ることができました。この共有のアクティビティは、「再構成」のアクティビティといい英語の学習に大変有効だという点にもつながります。「再構成」とは、生徒が先生から聞いた知識やテキストから学んだ知識を自分の知識としてアウトプットするアクティビティであり、私も普段の授業や研究授業においても実践したものです。例えば、その単元で学んだ文法やイディオムを、ハンドアウトを用いてライティングさせ、その後ペアや教室の全体に発信するアクティビティが有効に思われました。これによって、生徒は英語の4技能のすべてを使うことができ、コミュニケーション英語という授業にふさわしい授業展開をすることができました。二点目の授業中の指示に関するものについてです。これは自然な英語で生徒に指示を与え、その中で口語表現に慣れさせる働きがあり、これも軽視できない点です。多く教室英語と言われますが、教室内で英語の指示をすることで、自然なコミュニケーション能力の向上だけでなく、生徒にとって英語が身近なものになることも狙いの一つです。例えば、授業の冒頭に、何気ない教室の雰囲気の変化や、ニュースの内容を話すのも可能だと思います。こうした活動によって、日常の出来事を英語で表現できるきっかけにもなりうるかと思われま

【教科指導以外に関して】

次に、教科指導以外のアドバイスです。これは主に生徒同士の関係をはじめとする人間関係の構築におけるアドバイスになります。私が実践したのは、ホームルーム前の時間や放課後に教室に行き、生徒同士が授業外でコミュニケーションをとっている姿を見ることです。これによって誰が誰と仲が良いのか、普段はどんな生活をしているのかが確認できます。実際に私はこれによって人間関係を理解し実際の授業にその理解を落とし込むことが出来ました。人間関係は教育現場において必ず認識しなければならない点です。これには注意も必要です。さらに、私の反省点としては、自分から生徒にアクセスする必要があったように思われます。初日から自分をもっと表現し、関係を深める事で授業中の展開もスムーズにできたように思えます。現場に立てばお互いに人間であるのは当然ですが、普段から生徒と上手にコミュニケーションをとっていれば、実際の授業でも不要な緊張感なしにすすめることができます。

【最後に】

教科指導に関しするアドバイスと教科以外に関しての二点を以上に提示しました。それぞれの実習先によって雰囲気や条件は異なるとは思われますが、英語を教える実習生という点に関しては、みな変わりありません。それぞれに失敗を生かしつつ、学んでいくことが重要です。実習先の教諭や実習生からのアドバイスは真摯に受け止め、それを自分なりに学んでいくことも実習の一つです。私のアドバイスやそうした意見を参考に、皆様にとって大きな成長となる実習となることを祈っています。

教育実習に向けてのアドバイス

原澤 太熙

〈はじめに〉

私は5月22日から6月9日までの計15日間母校である沼田市立沼田中学校で教育実習をさせていただきました。担当学年は1年生で担当クラスは1年3組。実際に教壇実習を行ったのは1年2組と1年4組の英語、1年3組の道徳（計16コマ）を行いました。それに加えてT2（サブティーチャー）として1年1組と1年3組（13コマ）英語の授業に関わらせていただきました。HRや給食、清掃は1年3組と1年4組を担当しました。部活動はバスケットボール部を担当しました。私は教育実習に対して様々な不安がありましたが、終わってみると大変なのはもちろんのこと、様々なことを学び、体験することができました。これから教育実習に向かう皆さんに対して少しでも役に立てたら幸いです。

〈実習前の準備〉

私は4月28日に実習校に行き、打ち合わせを行いました。事前打ち合わせでは担当学年やクラス、担当部活、使用している教科書、実習期間中の行事、年間予定表の中での実習期間中の教科範囲、勤務業態について教えていただきました。私の担当教諭の先生が所用により忙しく打ち合わせ当日は顔合わせのみになってしまい細かな打ち合わせが行えませんでした。そのため後日改めて電話をかけ電話で打ち合わせを行ったのですが、担当範囲がまだしっかりと定まってないと伝えられたため、教材研究は年間予定表をもとに自分の担当範囲になりそうな所の音読、アクセント、単語の意味、文法の確認、生徒が躓きそうな箇所の確認、身に付けてほしいポイントの確認を行い、準備をしました。しかし、実習がはじまって2日目にはっきりと担当範囲を伝えられた際に、授業進捗の関係で自分の考えていた担当範囲と若干のずれが生じていることが判明し、実習期間中に教材研究のやり直しをしました。すべての範囲が変更されたわけではないのですが、時間を取られたことは確かです。教材研究に当たっては指定された範囲の前後もすることをお勧めします。

また打ち合わせは多少しつこいと思われても念入りに行うほうが良いと思います。実習が始まると授業準備に使える時間は限られます。私自身も家に帰ってからプリント作成などに追われ睡眠時間を減らすことも多々ありました。実習の準備としては担当範囲の前後を含めた教材研究、それに対応する授業の進め方、プリントの作成は行っておくとよいと思います。プリントに関しても担当教諭の先生の作成したものを事前に見させていただきそれをもとに作成すると生徒の混乱も抑えることができるのでお勧めします。

また実習日誌や指導案については記入できる個所はあらかじめ記入をしておくといいです。私は事前に行っていたのですが、一緒に教育実習を行った友人は記入を全くしていなかったためにその対応にも追われていました。また部活動の参加のための運動などの準備を行うようにするのもよいと思います。準備はしすぎて損することはありません。様々なことを予想してしっかりと準備を行って教育実習に臨んでください。

《授業見学》

まず授業見学についてお伝えします。私は最初の1週間(実7日目)まで授業見学をさせていただきました。授業見学ではただ見るだけでなく、導入や展開、時間配分、先生がどのような英語を使っているか、授業中の生徒との距離感、会話の内容など細かいところまで着目しメモを取りながら行うとよいと思います。事前に気になるポイントや注目すべきポイントを決めて臨むと漏らすことなくメモを取れて自分の授業に活かすことができると思います。授業中に出てきた疑問点や気になるところはしっかりと洗い出して先生にお伺いすると、どのような意図で行っているかを教えていただくことができるので勉強になります。時間のあてはなるべく多くの先生の授業を見学することで様々な授業形態を知ることができます。自分に合った授業の進め方もそこで分かると思うのでぜひ多くの授業を見学することをお勧めします。また見学する際は挨拶とお礼を忘れずにしてください。

《教壇実習》

次に教壇実習についてお伝えします。私は反省と改善の繰り返しでした。いくら練習を行っても上手くいくことはほとんどありません。気落ちすることはしなくてよいですがその都度しっかり反省と改善を行ってください。毎授業後に担当教諭の先生にご指導をいただき、そのアドバイスを受けて改善を行ってください。私は2クラス同じ授業を受け持っていたのですが、1回目の授業を行ってその後反省会を行い次の同じ授業に活かすように心がけました。特に指導を受けたのはクラスルームイングリッシュと指示と導入として扱う授業についてです。

私が実習をした母校は細かい文法の説明以外は基本的にオールイングリッシュで行いました。しかし、通じると思っていた表現や単語が通じなかったり、授業がうまく進まないときつい日本語が多くなってしまったりとオールイングリッシュの難しさを痛感しました。いくら英語が話せても生徒に通じる英語になるように心がけてください。

生徒に対する指示は細かく出してください。ノートやプリントに記入する際もノートやプリントのどこに記入するかを指示しないと生徒は記入してくれないことが多々あります。

導入として扱う授業はゲームやアクティビティーを取り入れることを念入りに指導していただきました。あらかじめ自分で考えて準備し担当教諭の先生と相談して実行するようにするとよいと思います。担当教諭の先生と全く一緒に授業形態でなければならないことはありません。私は担当教諭の先生に「実習生なりのオリジナリティをもって授業を行うことが大切。」と言ってくださいましたので失敗を恐れずに反省と改善を繰り返して授業を頑張ってください。

《その他》

生徒とは積極的に関わってください。いろいろな質問を受けて中には答えづらい質問も来るとは思いますが、その時に私は「英語でその質問ができれば答えてあげるよ。」と回避しました。また私の実習校は最終日に

学年集会で実習生のミニ講演会を開いていただき進路の話や当時のことを話す機会があったのでエピソードを用意しておくといいかもかもしれません。

教育実習の3週間はあっという間です。失敗を恐れず全力で取り組んでください。

後輩へのアドバイス

東山 華佳

《はじめに》

私は5月29日から6月17日の計18日間母校である私立成城学園高等学校で教育実習をさせていただきました。担当クラスはホームルームである2年B組、そしてレベル別クラスの2年C・D組でした。教壇実習を計8コマ(1コマ50分)、実習8日目から行いました。始まる前は不安でしかなかった三週間も、指導教諭の先生はもちろん、多くの先生方そして生徒たちからのアドバイスをいただき、あっという間に過ぎていきました。アドバイスができる立場ではないのですが、少しでも参考になれば幸いです。

《実習前の準備》

5月17日に事前打ち合わせを1度だけ行いました。中間テスト前ということもあり、先生方はとてもお忙しくこのタイミングで指導教諭とはお会いできず英語科主任の先生と打ち合わせをしました。ここでは使用する教科書をいただいただけで、実際にどこの範囲を担当するのかなどを確認することができなかったの、みなさんは範囲まできっちり確認したほうが事前準備も出来ますし、お勧めします。

学校が近かったので1度きりの事前打ち合わせだけでは不安に思い、何度か実習前に高等学校に足を運びました。(当たり前ですが、何の連絡もなしに実習校へ行くのは大変失礼です。先生方はとてもお忙しいので、必ず連絡をしてから訪問してください。)私は近かったので何度も足を運ぶことが出来ましたが、学校まで距離がある人はしっかりと事前準備までに聞いておくべきことをリストアップしておくと思います。細かいところだと、HRクラスの時間割、座席表(名簿、名前の読み方も)、指導教諭の時間割などです。

《生徒との関わり》

成城学園の生徒はとても優しく受け入れてくれて私から話しかけなくても、初日から生徒達から歩み寄ってきてくれました。朝礼や授業の前後、その他昼食休みなどでコミュニケーションを取ることは貴重な時間だったのでなるべく多くの時間をHR教室で過ごすことを心がけました。話題作りのためにも生徒のことをもっと知りたいと思い、3日目のHRの時間に名刺サイズの紙に自己紹介を記入してもらいました。この時期は行事もなく、朝礼終礼もないので他校よりも生徒と関わる時間が少ないと気付いたので実際に生徒のことを知らなければ授業はうまく進められないと思いました。名前はもちろん部活のことや、好きな科目、将来どのようなことがしたいか、私への質問など記入してもらい実際にこの自己紹介カードを授業内で指名する際に利用したりしました。実習の最終日には、担当したクラスで授業評価アンケートを実施しました。反省、そして自信に繋がる言葉を書いてくれる素直な生徒たちに恵まれたことを、改めて実感することが出来ました。

《授業について》

教壇実習の前に、なるべく多くの先生方の授業参観をするように心がけました。私は塾講師をしたこともなければ、英語を教えるという経験を今まで一度もしたことがなかったので自分に合うと思った指導法を集めて真似ようと考えたからです。実際に指導法を真似てみて、これは私に合っていないと思えば次の授業からこう変えていこうなど多くの授業を参観したことで多くの引き出しを持つことができ心の余裕にも繋がりました。具体的に進めやすかった指導法としては、音読させる際に生徒全員に立ってもらおうというものです。最初は「なんで立たなきゃいけないの～」といった声がちらほら聞こえましたが、音読をすることのメリットを伝えると進んで実践してくれるようになりました。

教壇実習前は、指導教諭と1コマ毎に1時間ほど事前打ち合わせ、反省会をしました。先生方は大変お忙しいので、このような膨大な時間を割いてくださったのはとても恵まれていると思いました。そして教壇実習には数回実習生同士でお互いの授業を参観し合いました。前述のように、私は1からのスタートだったので、先生方、そして実習生からのアドバイスはとても参考になりました。

実際に授業をした感想は、とにかく緊張した…という一言に尽きました。あと気付いたことは高校生の反応の薄さです。「もう黒板消していい？」と問いかけても静寂に包まれている教室、このあと授業評価アンケートで分かったことで、私は黒板を消すのが早かったということです。反応がないからといって、自分ペースで授業を進めるのではなく、しっかりとクラス全体をみて生徒と向き合い進めることが大切だと気付くきっかけになりました。

授業を進めていくうえで、うっかり間違ったことを教えてしまうなど後から指導教諭に指摘していただいて気付く失敗もありました。その際は失敗を引きずらぬようにし、補足プリントを作成しました。もちろん事前準備をしっかりとしていればこのようなミスは起こりませんが、失敗は誰にでもあることなので引きずらず次へ次へと考えていくことが大切だと思います。

《おわりに》

教育実習という貴重な3週間は人生一度きりなので、授業をこなすことはもちろんですが、自分が挑戦したいことは逃さないよう、実習が始まる前にしっかりと三週間を通してどう成長したいか目標を明確にすれば、実りのある教育実習になるのではないかと思います。

そして何より大切なことは、体調管理です。これは2ヶ月前くらいから心がけてください。私は実習が始まる1ヶ月前に突発性難聴になってしまい、周りのかたに迷惑をかけてしまいました。睡眠さえとれば、ある程度は体調管理に繋がります。教育実習が不安で寝られない…となるのであれば、その時間を睡眠時間にあててください。

皆さんの教育実習が成功することをお祈りしています。

後書き

3年生へのプレゼンが無事終了した次の授業で、国語、社会のプレゼンと共にDVD録画されたものを視聴し、「良かったと思うこと」と「次回、改善すべきと思うこと」とを全員に書いてもらうことでこのプロジェクトは終了した。

私も他学科の学生のプレゼンを共に見て、書かれたコメントを読んだところで感じた点を4年生が書いたものと共に紹介したい。コメントでは、私の授業内でプレゼンテーションはいかに構成されるべきか等を講義したため、非常に Critical にコメントをすることができていたという手ごたえがあった。

- ・プレゼン冒頭の質問「人前に立つと緊張するか否か」で聴衆の興味を引き付け挙手で参加させ、このプレゼンを聞けば大丈夫というメッセージを提示してプレゼンターが思った通りに発表ができている。(ほぼ全員)

ここは、授業冒頭での「つかみ」・ウォーミング・アップが重要であるという点にも通じ、プレゼンの内容構成を練る時に重視したことだった。聴衆をさらに引き付けるという点では、質問の順番を「大勢の人を前にして話す時に緊張をしない、という自信がある人」と挙手がほぼゼロになることを予測して口火を切り、その結果を聴衆に「手は(ほとんど)挙がりませんね。」「では、緊張する方だという人挙手をしてください。」「ほぼ全員ですね。」と聴衆に自分より後ろの人の動向を伝えて会場の一体感をつくり、そのうえで、「緊張するのは、あなただけではありません。実習前の私もそうでした。(実習を終えた私は違っていることを少し伝える) これからの私のプレゼンを聞けば、緊張しなくなるヒントがたくさんあります。」と言うのが理想でした。冒頭は、プレゼンター自身がまだ緊張が見られたところでした。

- ・最後に「教育実習は大変であったが、行って良かった」という4年生の感想を紹介したことがこのプレゼンがプレゼンターだけでなくクラス全員の協力が背景にあることが伝わり良かった。(ほぼ全員)

ここも、前書きで述べたように授業内で後輩へのアドバイスを全員で輪読し相互批評後に、クラス代表を選び授業内でプレゼンの予行演習と相互評価を行った一つの成果が出たと思った点である。実際、4年生2名がガイダンスに3年生に混じり出席しての感想でもあった。ただ、パワーポイントではスライドのアニメーション効果でQ&A形式でAを聴衆に想像してもらい「間」を含めて進める予定が、スライドが全て印刷・配付されており、スライドに沿って作成されたレジュメが聴衆の手元にあるという想定とは異なってしまったがそれでもプレゼンターが冒頭で自分の意図とは異なることを伝え、プレゼン資料が別にあることとその意図も伝えることがしっかりとできた点は立派であったと思い、指導案通りに授業は進むことはない…臨機応変が重要という実習で得たであろう教訓を体現していることを心から嬉しく思ったものでした。(2017年12月)